

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)は、河川再生に関わる事例・経験・活動・人材等を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に2006年11月に設立されました。また、日中韓を中心に活動する「アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)」の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、同時に海外の素晴らしい取組みを日本国内に還元する役割を担います。

目次	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ	1
➤ 会員寄稿記事	5
➤ JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ	26
➤ 会議・イベント案内	27
➤ 会員募集中	28

## JRRN 事務局からのお知らせ(1)

### 『よみがえる川～日本の河川再生事例集～vol.2(仮)』 原稿執筆者募集中

昨年度、国内外の河川再生に関する事例集「よみがえる川～日本と世界の河川再生事例集～(URL:<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/25>)」を発行しました。その事例集に関するアンケートを会員の皆様に実施したところ、「河川保全活動を行われている方の生の声を聞きたい」との要望が多く寄せられました。

今年度はそれらご意見を踏まえ、河川再生の取り組みをクローズアップした事例集作成を企画しました。この事例集は、個人や各種団体の取り組みの成果や悩みを共有し、皆様の河川再生・保全活動の取り組みのヒントを見出すものとして期待しています。

事例集作成にあたり、原稿を執筆して頂ける方を、下記の要領により募集いたします。河川再生の取り組みに関する質問に答えて頂く形で、皆様の生の体験・経験・取り組みの自慢・悩みなどを文章と写真でお寄せ下さい。

- ・ 皆さんが河川再生に取り組まれている川を紹介して下さい。
- ・ 皆さんが取り組むはじめたきっかけと目標を教えてください。
- ・ 皆さんが全国で紹介したい(自慢できる)取り組みとそれが実現できたポイントを教えてください。
- ・ 皆さんの取り組みで悩みになっていること、他の良い事例から得たいことなどはありますか？
- ・ 皆さんの取り組みはどのような方々と協働して取り組まれていますか？

なお、作成した事例集は全国の学校・図書館を中心に配布を予定しています。皆様のご応募をお待ちしております。

#### 【募集内容】

1. 応募条件: 河川環境の保全・再生に携わる方
2. 募集期間: 2012年10月4日(木)～11月上旬
3. 応募方法:

執筆希望の方は以下の内容を記載したメールをJRRN事務局([info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net))まで送付下さい。

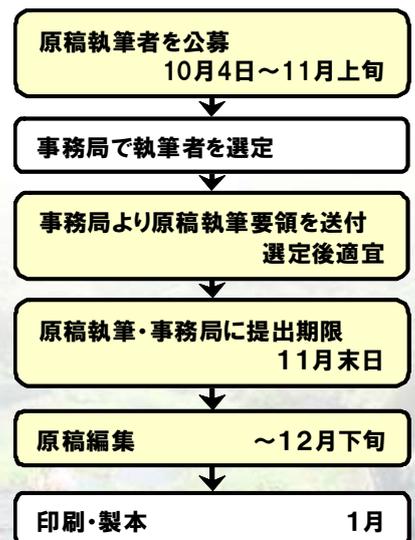
- ・ 応募者の氏名・所属
- ・ 連絡先(E-mail アドレス、住所、電話番号)
- ・ 応募する河川または水域の名称と所在地(都道府県、市区町村まで)
- ・ 取り組みの概要(300文字以内)  
応募者の河川再生に関する取り組みの概略が分かる程度

応募状況・内容に応じ、事務局による原稿執筆者の選定を行う場合がございます。あらかじめご了承下さい。

また、複数河川で活動している場合、それぞれの河川を1件として複数の応募が可能です。

詳しくは、JRRNウェブサイトの募集記事をご覧ください。

(URL: <http://jp.a-rr.net/jp/news/info/185.html>)



事例集作成スケジュール

 は、執筆者と事務局との共同作業

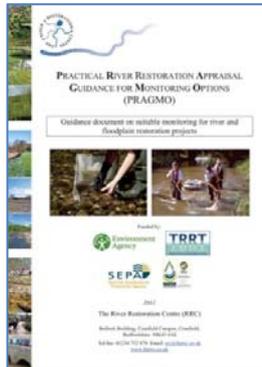
(JRRN 事務局・伊藤将文)

## JRRN 事務局からのお知らせ(2)

### 英国河川モニタリング手引き「PRAGMO」日本語版の作成進捗報告(11月中旬完成予定) 及び

12/1(土)開催行事『市民による河川環境の見方・調べ方～英国 PRAGMO に学ぶ』 **参加募集案内**

JRRN ニュースレターの 2012 年 7 月号及び 8 月号でもご案内させて頂きました通り、JRRN では、昨年 11 月に英国河川再生センター (RRC) より発行された河川再生モニタリング手引き「PRAGMO」の日本語翻訳版製作を JRRN 会員とともに進めております。



7 月にご応募頂きました JRRN 会員 10 名 (内訳: 3 名の技術者及び研究者、7 名の学生会員) の翻訳ボランティアのご尽力により、今回翻訳対象とする部分の翻訳活動が終了し、現在は筑波大学白川直樹准教授監修のもと、11 月中旬の日本語版完成に向けた全体編集作業を筑波大学白川研究室「川と人」ゼミ学生チームの協力を得ながら鋭意実施中です。

11 月中旬には PRAGMO 日本語版電子版(PDF 版)を JRRN ウェブサイトを通じ皆様に無料公開します。

また 12/1 (土) には日本語版完成を記念した講演行事を東京にて開催 (※本ページ下段参照) いたしますので、皆様のご参加をお待ちしております。

(講演行事参加者に日本語版を謹呈致します)



筑波大学白川研究室学生チームによる全体編集作業

なお、PRAGMO 日本語版作成及び講演行事は、(財) 河川環境管理財団の河川整備基金の助成を受けて実施致します。

(JRRN 事務局・和田彰)

### JRRN 主催講演会 <2012 年 12 月 1 日 (土)・東京開催>

#### 「市民による河川環境の見かた・調べかた～英国『PRAGMO』に学ぶ～」

- 開催日時: 平成 24 年 12 月 1 日 (土) 13:30 - 17:00
- 開催場所: 発明会館ホール (東京都港区虎ノ門 2-9-14)
- 参加費: 無料
- 定員: 200 名 (先着順)
- 言語: 日英逐次通訳
- プログラム

## 参加者募集中!

- 13:30~13:35 開会挨拶 佐合 純造 (JRRN 事務局長)
  - 13:35~13:40 「PRAGMO」の紹介 (JRRN 事務局)
  - 13:40~14:40 基調講演 1: PRAGMO 作成背景と特徴、活用 (ジェニー マント・英国河川再生センター)
  - 14:40~15:10 基調講演 2: 荒川における河川再生 (恵 小百合・荒川流域ネットワーク 代表)
  - 15:10~15:25 休憩
  - 15:25~16:55 総合討論: 「市民による河川環境調査の更なる推進に向けて何が必要か」
- 座長: 白川直樹 (筑波大学 准教授 / ARR 技術委員)
- パネラー:

ジェニー マント (英国河川再生センター)、恵小百合 (荒川流域ネットワーク代表)、山道省三 (NPO 法人 全国水環境交流会代表)、藤井政人 (国土交通省 水管理・国土保全局 河川環境課 河川環境保全調整官)

-16:55~17:00 閉会挨拶

※講演会後に懇親会を予定しております。あわせてご参加下さい。(会費: 3,000 円程度)

※本行事へ参加された皆様に PRAGMO (日本語翻訳版) を謹呈させていただきます。

- 主催: 日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)、アジア河川・流域再生ネットワーク (ARRN)、公益財団法人リバーフロント研究所
- 後援: 英国河川再生センター (the River Restoration Centre)

参加申込等の詳細はこちら: <http://jp.a-rr.net/jp/news/info/190.html>

# JRRN 事務局からのお知らせ(3)

## 『アジアに適応した河川環境再生の手引き ver.2』に関するアンケート結果の概要報告

『アジアに適応した河川環境再生の手引き ver.2』の改善に向けて、本手引きに関するアンケート調査を実施しましたので、その結果を抜粋した概要を報告致します。

- 実施期間：2012年10月3日～10月26日
- 回答者数：15名

### 【アンケート結果概要】

- 設問「ARRN手引き」を利用したことはあるか(図1)では、本手引きを利用したことがある回答者はわずか1名と、本手引きの活用面で課題があることがわかりました。
- 設問「ARRN手引き」の作成目的に対して十分な内容であったか(図2)では、「十分な内容」との回答が6割、「十分でない」との回答が3割であり、本手引きが事例や写真中心で分かりやすいというご意見もある一方で、紹介されている内容のほとんどが国レベルの取り組みのため、一般の方々が参考にするには専門性が高いとのご意見もいただきました。
- 設問「ARRN手引き」のどの項目が参考になったか(図3)では、本手引きの主要な項目(2.～5.)が全体的に参考になるとの結果となり、日中韓の河川

再生の経緯や具体的な取り組みが参考になるとのご意見をいただきました。

- 設問「ARRN手引き」のどの項目が参考にならなかったか(図4)では、特に参考とならなかった項目はないとの回答が多かった一方で、参考とされない理由として、図やリストに対して説明が十分でなく、専門用語の解説も必要など、今後の手引きの改善に参考となるご意見をいただきました。

- 設問「ARRN手引き」に今後充実して欲しい内容”については、事例や参考文献(公開資料)の一覧の追加や、既存の基本項目(2.)の内容(説明)の充実など、ご要望をいただきました。

今回のアンケートでは、本手引きの利用実態や非常に参考になる改善意見を把握することができました。いただいたご意見を今後の手引きの改善に反映させるため、11月に実施するARRN技術委員会に報告、協議を行ってまいりますので、協議結果は皆様にも報告させていただきます。

なお、アンケート結果の詳細については、11月中旬頃にJRRNウェブサイトにて公開する予定です。

(JRRN事務局・後藤勝洋)

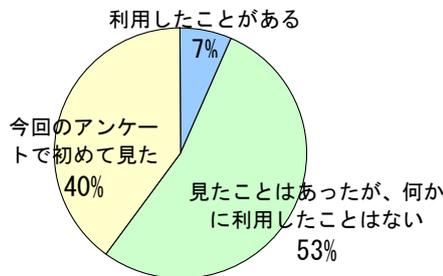


図1 「ARRN手引き」を利用したことはあるか

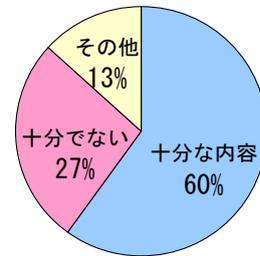


図2 「ARRN手引き」の作成目的に対して十分な内容であったか

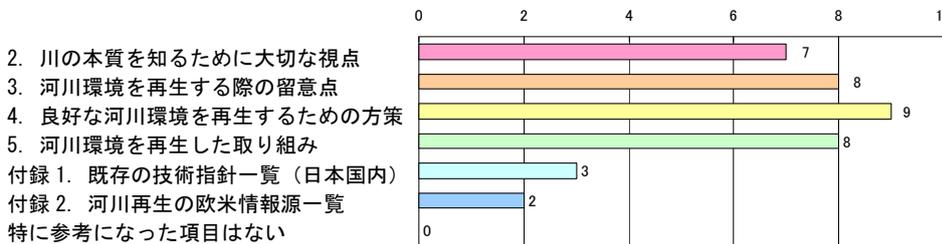


図3 「ARRN手引き」のどの項目が参考になったか

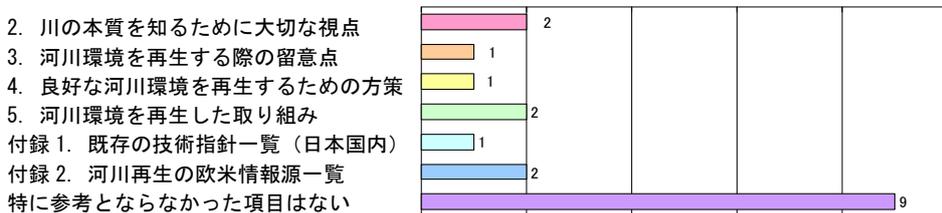


図4 「ARRN手引き」のどの項目が参考にならなかったか(内容が不十分であったか)

※「ARRN手引き」は、広く一般の方々の身近な川への関心を高め、新たな河川再生に向けた取り組みに関わるきっかけを与え、現在取り組む再生活動を後押しすることを目的に作成したものです。

## JRRN 事務局からのお知らせ(4)

### 『第 15 回国際河川シンポジウム(2012 年 10 月 8 日～11 日・豪州メルボルン)』参加報告速報

今年で 15 回目となる International Riversymposium が、「急速に都市化する中での河川」を主テーマに、オーストラリア国メルボルンにて 2012 年 10 月 8 日～11 日に開催されました。



開会式の様子

これまでの JRRN 活動で蓄積した知見の紹介、及び JRRN や JRRN が現在事務局を担う ARRN の更なる拡大に向けた河川再生分野の海外関係機関との交流等を目的に参加する機会を得ましたので、概要を簡単にご紹介させていただきます。

#### ■国際河川シンポジウムとは？

本行事はオーストラリア政府系 NGO 主催行事として 1998 年から始まり、本年は約 25 カ国・400 人の河川に関わる研究者、市民団体、政府関係者、民間企業関係者が参加しました。

本行事は、河川再生に関わるオーストラリア国内及び世界の成功事例を、河川再生の担い手である様々なセクター関係者で共有し、河川及び流域の生態的・社会的価値をより高めることを目標とする行事です。

また、毎年「河川賞(Riverprize)」として優れた河川再生活動が国内外 1 事例ずつ表彰され、本分野で名誉に当たる賞の一つとして世界的に認められています。ホームページ(英語): <http://riversymposium.com/>

#### ■討議テーマの紹介

本年は以下の 6 つをテーマに、発表と活発な討議が行われました。

1. 都市と河川 (A river runs through it: designing river cities)
2. 川の健全性 (River health: healthy rivers, healthy economies, healthy people)
3. 川の生態系 (River ecology: beneath the surface)

4. 川のナレッジ (River knowledge: tools and techniques for action)
5. 川への期待 (River pressures: pathways to sustainability)
6. 川のパートナーシップ (River partnerships: integrating people, governance and policy)

#### ■本年の河川賞 (Riverprize) 受賞河川



国際河川賞授賞式の様子

オーストラリア国内より 3 河川、また海外より 3 河川が最終選考に進み、それぞれの取組をアピールする口頭発表を経て、本年は以下の河川が受賞しました。

- ・豪州河川賞: Condamine 川 (豪州クィンズランド州)
- ・国際河川賞: Willamette 川 (米国)

※受賞河川の詳しくはこちら (英語):

[http://riverfoundation.org.au/riverprize\\_about.php](http://riverfoundation.org.au/riverprize_about.php)

#### ■日本からの参加者及び発表

本年は日本から 2 名の参加がありました。JRRN 事務局より「日本における河川再生事業の成功要因分析」という口頭発表を行うとともに、JRRN 会員でもある都筑良明様 (P10 寄稿記事参照) からは「水環境改善の費用便益と包括的分析手法」をタイトルとしたポスター発表が行われました。

#### ■Yarra 川現地視察ツアー (10 月 11 日)

本ツアーの詳しくは、本ニュースレターの P10 でご紹介している都筑良明様からの寄稿記事をご参照下さい。

なお、「第 15 回国際河川シンポジウム」の詳細な参加報告は、後日、以下の JRRN ウェブサイトを通じご紹介させていただきます。

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/>

(JRRN 事務局・和田彰)

# 会員寄稿記事(1)

## 北京でのインターンシップ報告

寄稿者：内田考洋（名古屋大学大学院 社会基盤工学専攻 水工学講座 博士課程前期課程・JRRN 会員）

### 1. IWHR

9 月に 2 週間ほど北京に滞在し、IWHR(China Institute of Water Resources and Hydropower Research：中国水利水電科学研究院)でインターンシップを行いました。IWHR とは中国政府の研究機関で、水資源や流域の管理、水環境保護、洪水制御、堆砂、水力発電など河川に関する幅広い研究を行っています。また、研究だけではなく IWHR は政府が行っているプロジェクトや海外の大規模プロジェクトに対してコンサルタントや計画、構想、建設、技術提供を行っています。

特に近年、IWHR は河川環境、景観に力を入れて取り組んでおり、JRRN のパートナーである CRRN（中国河川再生ネットワーク）の事務局も担っています。私も今回のインターンシップでは河川環境の再生・保護を目的に行われた河川再生事業後の河川をいくつか視察することができました。また、中国の河川管理の現状についても学ぶことができました。



写真 1 IWHR のビル

### 2. 北京の河川再生事業

北京には多くの都市河川が整備されています。これら都市河川の多くは人工的に造られた河川であるため、兩岸をコンクリートで舗装され、植生も繁茂しておらず、生態系や環境への配慮が欠けていました。しかし、環境に配慮した自然と調和した河川が求められるようになり、河川が持つ自然の状態を取り戻すための河川再生事業が北京の多くの都市河川で行われました。

写真 2、3 は河川再生事業完了後の河川の様子です。両河川ともに整備後は魚などの生物も多く生息し、植

生も繁茂した自然と調和した河川景観を創出しています。しかし、両河川共に水質が悪く、水が濁っており、河の中がほとんど見えない状況でした。さらに、写真 1 の河川は悪臭を放っており、河川の水質改善に関しては不十分だと感じました。IWHR の方の話によると北京の都市河川再生事業は主に河川景観に重点が置かれており、水質は二の次になっているそうです。両河川の河川再生事業もこれで完了しており、水質を改善するための事業計画も特にないとのことです。個人的には良好な河川景観を創出しているので水質の改善にも着手してほしいと感じました。



写真 2 この河川は公園の中を流れており、この公園にはかつて皇帝の住まいがあったそうです。緑が多く、良好な河川景観を創出しており、散歩をしている人々を多く見かけました。



写真 3 この河川は写真 1 の河川よりも水質が良く魚も多く確認でき、釣りをしている人もいました。また、河岸もコンクリートで舗装されておらず植生が繁茂しています。写真では確認できないのですが、河岸には歩道が整備され

ており、散歩ができるようになっています。

### 3. 洪水被害

北京は今年の7月21日に過去61年間で最大の降水量を記録した豪雨に見舞われました。河川の堤防が破壊され、浸水し、約70人の犠牲者が出ました。私は北京中心から南東に約100km離れた十渡国区へ行き橋梁の破壊や浸水被害を受けた地域を視察しました。写真4のように壊された橋がいくつか確認できました。このような橋はほかにも多く建てられているのですが、現在は全て通行禁止となっています。この地域は北京中心から離れているということもあり、7月21日の洪水が起こるまでは特に洪水対策はしておらず、中国政府の認識が甘かったようです。視察中も堤防などの洪水対策の構造物はほとんど確認できませんでした。また、この川はダムがないため、今回の被害を受けて上流側にダムを建設することが現在計画されているようです。

このように洪水対策が遅れている理由は、中国では予算の大部分を河川整備に用いており、一部しか洪水対策に使われていないためようです。さらに、近年では中小河川の洪水対策の必要性も叫ばれており、洪水対策は今後も中国で引き続き重要な課題になると感じました。

### 4. 水不足

北京はまた水不足にも悩まされています。北京周辺を流れる河川は上流での水資源の無制限な多目的利用や人間活動の変化、気候変動の影響を受け下流側が水不足になる傾向があります。そのため、北京では長江から河川水を西、中央、東の3ルートを通して輸送し、北京の水不足を解決することを目的としたプロジェクトが計画、実施されています。このプロジェクトにより2014年から長江の水を利用できるようになります。とても大規模なプロジェクトで興味があったのですが、今回は視察できませんでした。

一方、下流側だけでなく上流側も汚染物質や生活排水を河川に直接排出しているために河川が汚染され、利用できなくなり水が不足しているようです。日本では上流の水は綺麗というイメージがありますが、中国では必ずしもそうではないようです。中国内陸部のインフラが十分に整備されていないのではと思われます。

### 5. 北京を訪れての感想

今回初めて北京を訪れたのですが、とても発展しているという印象を受けました。地下鉄や路線バスも非常に整備されており、また安く便利でした。日本の公

共交通機関も同じくらいに安くなってほしいです。中国といえば自転車が道いっぱいに走っているという印象がまだ多少あったのですが、日本と同じように車が交通の主要となっており、印象が変わりました。

一方で、北京郊外の洪水対策や道路などのインフラ整備は少し物足りないと感じました。中国はすでに経済大国となっており、勝手な想像ですが、主要都市以外のインフラ整備はまだ追いついていないのかなと思いました。

インターンシップを北京という日本と違った地理的条件、価値観、文化の中で行うことができ、非常に新鮮でした。また、北京と日本の都市河川の特徴の違いや河川管理の考え方の違いを学ぶことができ、興味深かったです。

インターンシップ中はIWHRのスタッフの方に非常にお世話になりました。様々な面でサポートして頂きました。本当にありがとうございました。



写真4 洪水によって破壊された橋。橋脚の高さも低く、洪水に対する認識が低かったと思われます。



写真5 河川から50m程度の位置から撮影した河川敷の様子。洪水時はここも浸水し、構造物が破壊されたそうです。すぐ側に道路があるのですが、堤防らしきものはありませんでした。

## 会員寄稿記事(2)

### 「平成 24 年度多自然川づくり研修会」報告 ～ 愛媛県 地域の宝「アサザ」が結ぶ住民と行政

寄稿者：藤原 美紀（鞍瀬塾事務局・JRRN 会員）

#### (1) 平成 24 年度多自然川づくり研修会のあらまし

今年も、「周桑いのちの樹」の専門部会の東予環境グループと鞍瀬塾が主催して平成 24 年度多自然川づくり研修会を 7 月 21 日(土)に東予地区、8 月 28 日(火)に南予地区と 2 か所で開催しました。(多自然川づくり研修会の主旨については JRRN Newsletter Volume 39 (2010 年 9 月) をご覧下さい。)

今年度の多自然川づくり研修は、2 部構成でおこないます。午前中に国土交通省(四国整備局)の出前講座を開催し、午後は愛媛県が取り組みを進めている多自然川づくりの実施箇所にて担当者から川づくりの説明をいただきます。

東予地区研修会につきましては、31 名の参加者がありました。

研修日前日に、会場のある西条市の加茂川で幼児の水難事故が起き、尊い犠牲者が出ました。その後も加茂川では、2 名の水難事故の犠牲者が相次いだため、地元住民からの依頼もあり、東予地区において 11 月下旬に改めて水難事故現場の現地研修を行う予定です。



#### (2) 南予地区研修会について

8 月 28 日に開催した南予地区研修会は、愛媛県西予市の県立歴史文化博物館の研修室を会場に開催し、市民や行政関係者等 22 名が参加しました。

余談ですが、愛媛県南部の宇和島地区(南予)では、高速道路の宇和島までの開通を受けて、南予の 1 市 3 町において、「うみ・かわ・もり・ひと、楽園めぐり」をテーマとした、観光振興イベント「えひめ南予いやし博 2012」が開催されています。

#### ① 四国整備局出前講座「多自然川づくり」について

午前中は、国土交通省四国整備局河川部 河川工事課 渡邊健二課長補佐より、河川が本来有している生物の良好な生育環境に配慮し、美しい自然環境を保全あるいは創出するという、「中小河川の河道計画に関する技術基準について」に基づく「多自然川づくり」の背景や特徴及び四国地方整備局における取り組み事例等々について紹介していただきました。

#### ② 内平ヶ谷川の河川整備の見学

午後からは、愛媛県南予地方局建設部が取り組んでいる中山間地域での河川整備のうち、宇和島市三間町を流れる内平ヶ谷川の河川整備について現地研修を行いました。

内平ヶ谷川は、高知県四万十市から太平洋にそそぐ大河「四万十川」の支流「広見川」の支流になります。河川延長は、約 4.5km、流域面積 6km<sup>2</sup>、河川勾配は、1/100、流速 3.7m/s です。

3 (一)内平ヶ谷川 改修位置図



内平ヶ谷川改修位置図

今回、見学をさせていただいた整備箇所は3か所です。愛媛県南予地方局建設部河川港湾グループの岡本担当係長より河川改修事業について説明をしていただきました。

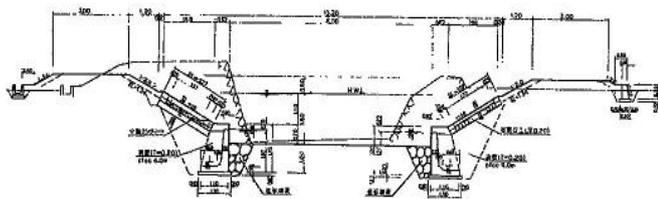
護岸工の選定に当たっては、自然環境、景観に配慮した工法を選定しています。

ただし、施工年が平成3年から現在（継続中）までと長いため、施工箇所によって工法が変わっています。

#### イ. 法枠護岸工施工箇所

現場研修で最初に見て頂いた、法枠護岸工は、施工当初の工法で、法枠内に目的に応じた各種の間詰を行うことができることなどから採用しています。たとえば、水衝部には、景石を貼ったコンクリートの中詰、その他の箇所には、植生基盤となり護岸として機能することを目的に、割栗石の間詰材としています。

現地でも確認いただいたように、割栗石を施工した箇所には、周囲の環境に馴染んだ植生が見られる護岸として機能し、水田地区の景観にもよく調和していると思います。



河道改修区間標準断面図（下流区間）



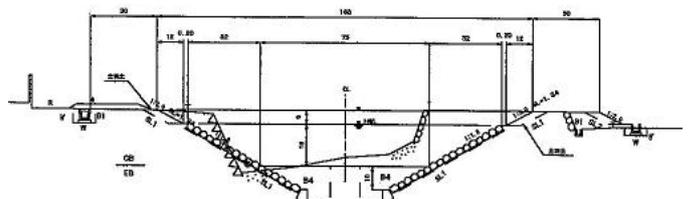
施工区の状況

#### ロ. ストーンネット施工箇所

次に見て頂いた、ストーンネット工は、平成22年度に施工した箇所で、周囲は、住宅地と水田地帯の境界付近で、小中学校も近いことから、水辺の生態系に配慮した親水護岸を形成するために、自然石を用いた護岸工法を採用しています。

この工法は、コンクリートを使用しない工法で、自然石をネットに連結したあと現地発生土で覆土を行い、より自然環境に近い空間を形成した工法です。

こちらでも、現地で確認いただいたように周囲と調和のとれた植生環境が形成され、良好な自然環境の保全が図られていると考えています。



河道改修区間標準断面図（上流区間）



施工区の状況

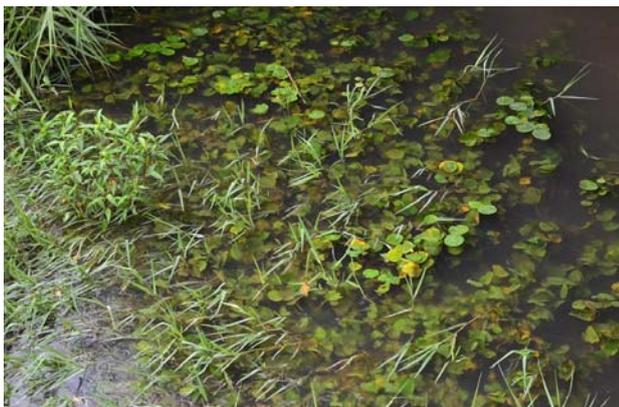
参加者からは、水際と護岸との間の連続性もあり、周囲の環境に配慮した点もよくわかったが、植生環境については、外来種らしきものも目立ち、もともとの植生環境がどうであったのか、また、地元の人たちがこの整備箇所についてどのような感想を持っているのか知りたかったという意見がありました。

#### ハ. 絶滅種アサザ群生箇所

アサザは、本州を中心に、池や沼に分布するミツガシワ科の多年草です。泥中に地下茎を張りスイレンに似た葉を水面に浮かべます。花卉の縁の細かい切れ込みが特徴的な、3cmほどの黄色い一日花を咲かせます。6~7月の2ヶ月間に次々と咲かせます。

自生地の開発や水質悪化で全国的に個体数が少なく、

環境省のレッドリストでも準絶滅危惧種とされています。



今年の5月に「三間の自然を守る会」会長の武田利康会長が別の植物の調査をしていて偶然気付き、東雲短期大学の松井教授により確認されました。

研修会では保護活動を行っている地元の、武田利康氏と早見萬之助氏より、雨の降る現地にてアサザの絶滅危惧に陥った状況とアサザの生育するこの地域の環境の重要性、「三間の自然を守る会」の活動はもちろんのこと、地元中学生による川の清掃活動など地域による保全の取り組み等についてご説明いただきました。また、両氏より「アサザを地域で育み、環境保護の象徴として、そして三間のシンボルにしていければ」と今後の夢を語っていただきました。



### (3) 最後に

「アサザ」の発見は、自然からの地域の人たちへの贈り物のような気がします。約10年前からスイレンに似た葉が浮いていたことに気づいていた地元の人たち。地域の人たちが故郷の自然環境を守ってきたからこそ今回の発見です。「多くの人たちにアサザを見てもらうことが自然を見つめなおす機会になる」という地域の人たちの願い。それにこたえようとする南予地方局河川港湾課の取り組み。

自然を守ることは自然を知ることから始まります。都会にだって自然はあります。休みの日には、身近な自然を探しに行きませんか。

## 会員寄稿記事(3)

### 第 15 回国際河川シンポジウム(豪州・メルボルン)「Yarra 川スタディー・ツアー」 参加報告

寄稿者：都筑良明 (島根大学汽水域研究センター 協力研究員・JRRN 会員)

※「第 15 回国際河川シンポジウム」概要は本レターP4「JRRN 事務局からのお知らせ(4)」をご覧ください。

今年のスタディー・ツアーは、Melbourne Water の主催であった。これまでは会議と並行していたこともあったが、今年は 3 日間の会議後の最終日に設定されていたので、日程に余裕がある希望者は全員参加することができ、参加者は全体で約 160 名であった。160 名が一度に見学することが困難な地点も多く、約 40 名ごとにバスに分乗し、4 か所の見学地点と昼食のレストランを、異なる順番で回るという予定が組まれていた。各地点での説明担当者は、春の初めという季節で例年に比べて肌寒さも感じる中、一日中外に居ることになった方もいらっしゃると思われ、風邪などひかれなかったことを祈るとともに、このようなスタディー・ツアーを企画していただいたことに感謝したい。

見学地点は、上流から、Maroondah Reservoir, Domaine Chandon, Glen Iris Wetlands, Dights Falls の 4 か所であった。筆者のバスは、上流からこの順に移動した (写真 1, 2)。



写真 1  
Melbourne Water の  
スタディー・ツアー  
のリーフレット

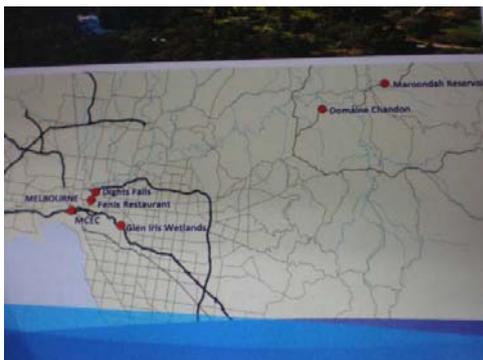


写真 2 スタディー・ツアーの見学地点

(1) Maroondah Reservoir (写真 3, 4) : Yarra 川の上流に位置し、いわゆる水がめのダムである。メルボルン市の上水道源、環境用水、灌漑用水に利用されている。Waterwatch Victoria というコミュニティ参加プログラムを実施しており、水中の生物の観察用のバケツに川底の生物のサンプル、観察用のハンドブックを用意していただき、実際に様々な昆虫が生息していることを観察した。



写真 3 Maroondah Reservoir での解説



写真 4 Maroondah Reservoir での Waterwatch

(2) Domaine Chandon (写真 5, 6) : ワイン農園。Yarra 川の水利権、Melbourne Water の役割、River Health Incentives Program 等の話を聞きながら、水量測定器具等の模型を見学した。Rural Land Program という枠組みにおいては、地権者と相談しながら土砂、栄養塩等の流出制御を行っていることの説明があった。このワイン園でもそのような目的で Reservoir が設けられていた。ワイン園では Stream Frontage Management Program の枠組

みにより、Yarra 川の水をブドウ生育に活かすこと  
等が試みられている。



写真5 流量測定装置 (ワイン農園にて)



写真6 ワイン農園と貯水池

(3)Glen Iris Wetlands (写真7, 8) : Melbourne 市  
の近郊に、洪水緩和、水質改善等を目的とする 30 ha  
の湿地帯が設けられている。1996 年の洪水の際に  
は、史上初めて、付近の住宅地まで冠水した。



写真7 Glen Iris Wetlands



写真8 Glen Iris Wetlands での解説

(4)Dights Falls (写真9, 10) : Yarra 川の重要性 (歴  
史、文化、環境、社会)、先住民文化 Wurundjeri の  
文化と Yarra 川の説明があり、Dights Falls と修復  
中の魚道を見学した。



写真9 アボリジニの文化についての解説  
(Dights Falls にて)



写真10 Dights Falls と魚道 (工事中)

Melbourne 市 (Victoria 州の州都。Greater  
Melbourne Metropolitan area の面積 9,990.5 km<sup>2</sup>,  
人口 417 万人 (2011 年)、人口密度 417 人/km<sup>2</sup>。

Melbourne 市のみでは、37.7 km<sup>2</sup>、人口 10 万人、人口密度 2,669 人/km<sup>2</sup>※1 は世界で最も住んでみたい都市の最上位にランクされることも多い都市なので、シンポジウム期間の前後でもう少し時間的余裕を持って見学したかった気もするが、予定がタイトであり、ほとんど観光的な行動を行うことができなかった。トラム（市電）で、郊外へ約 30 分程度の辺りまで移動したが、この間に、中心市街地、大学・研究所街（いくつかの大学、研究所がある）、商店街という街並みの遷移が観察され、コンパクトな中心市街地と生活空間とが近接していることが伺われた。

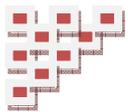
アジアではメガシティが数多く誕生しつつある。オーストラリアの大都市では、例えば、朝晩の通勤電車は、路線によっては必ず座れるというほどではないようではあるが東京ほどの混雑は見られないというように、周辺の空間に余裕がある都市の発展が見られる。日本では便利な大都市に特に若年層、勤労年齢層の人口が集中する傾向があるのは、都市政策、人口政策、経済政策等がそのような人口の移動を誘導することになるような政策を指向してきた成果であり、世界有数のメガシティを形成することになってきているのであると思われる。しかしながら、ブータンで導入されているグロス・ナショナル・ハッピーネス（GNH）を引くまでもないかもしれないが、一般の人々の最大幸福のようなことを考えると、巨大都市の人口が増加している傾向は、決して好ましいものではないであろう。日本人は、戦後の高度成長期以降、効率化を優先するあまりに、大切なものを数多く捨ててきたのかもしれない。現在の経済状況は、バブル期を経て、約 10 年間の経済停滞期にあると思われる。公共事業のみならず、多くの予算が削減され、公務員の給料の削減まで始まった。これは経済全体が縮小する原因となる。悲観することばかり述べたが、依然として世界全体では第三位の経済規模を有している。国も地方も借金だらけで、どこにそのような余裕があるのか不思議な感じもする。経済学の本流では扱わないような部分に資金が流れているのではないかという疑問もある。マクロ経済学者に、このような要素を含めた日本の将来像を描いていただきたいと考えているのは著者だけであろうか。経済全体の一部にブラックホールがあると、経済活性化は容易ではない。

さて、河川再生にも予算が必要である。資金源は、公的資金または民間資金であろうか。どちらも現在はかなり厳しい状況にあると思われる。あるいはアメリカの環境 NGO※2 のように独自予算で自然保護活動を行うということも長期的な選択肢の 1 つとしてはあり

得るのであろうか。環境経済学等の新しい考え方により自然の価値が計算されるようになってきている。そのような価値を単なる学術的研究という画餅に終わらせずに、公的機関の政策や民間活力の活用に活かせる形で実経済が動くような方向性を実務家が示すことにより、中長期的に AMC のような規模の環境 NGO あるいはそれ程ではなくとも、活動資金や会員を十分に要するような環境 NGO が成長し、自然保護や河川再生に寄与したり、主体となって活動したりすることが可能になるのではないだろうか。このような面について、日本の実務家（行政と民間）は、今まではうまく進めることができているというのが実情なのであろう。税制等も関連するので、複数の省庁が関連するような点が、この面の施策がなかなか展開しない理由でもあろう。その結果が、依然として経済規模は世界 3 位を誇ってはいるが、国内経済の停滞であり、自然保護、再生等に対する主体の多様性を欠くような社会構成を生じていることになっているのではないだろうか。流域レベルの保全を念頭に置くと、地方レベルの経済活性化が今後の課題となることも考えられる。国土交通省を中心に縦割りの行政の枠組みの中で河川再生も考えられてきている部分が多く、地方主体に移行できるのか、あるいは移行するののかという選択は中長期的な課題となるであろう。分野は異なるが、エネルギーが原子力という集中型から、風力、太陽光発電等の分散型に転換される流れが顕著になると地方の経済発展に寄与する可能性もあるのかもしれない。

※1: 出典: City of Melbourne ホームページ  
(<http://www.melbourne.vic.gov.au/>)

※2: 世界自然保護基金 (WWF)、ネイチャー・コンサーバシー等の世界規模の NGO もあるが、地方レベルの環境 NGO の規模、活動範囲等にも注目すべきである。例えば、アパラチア高原クラブ Appalachian Mountain Club (AMC) は 1876 年に設立され、現在ではニューイングランド州、ニューハンプシャー州、メイン州等の 1500 マイルのトレイル、70 万エーカーの土地を所有、管理している (Lemieux, 2012, Producing Public Goods Privately, REGULATION, Fall 2012, 8-11)。さらに、農務省と連携して、メイン州からジョージア州の 2,000 マイルのトレイルの維持管理を支援している。会費を支払っている会員数 8 万 3 千人、常勤、非常勤合わせて 450 人を雇用し、2011 年の年間予算額は 29 百万ドル (約 23 億円) で 98% が私的収入 (公的予算以外の収入)、資産額は 113 百万ドル (約 90 億円) であり、2010 年にはロビー活動に 10 万ドル (約 800 万円) を支出した。一方で、アメリカと日本との決定的な違いとして、日本の国土面積がカリフォルニア州と同程度であるということがある。日本の地方レベルが主体となる河川再生という考え方が成り立つのかどうかということは一考に値する。フラクタルのように規模は異なっても、地方の多様性があり、地方レベルで独自の河川再生を行うという考え方もできるであろう。他方では、日本はアメリカでいえば既に 1 州程度の規模であるので、日本の中央集権型は規模で言うとアメリカの地方レベルの規模に相当するので、それほど多様性は必要ないという考え方も可能である。どちらが望ましいかの見極めも必要である。



## 川系男子の『川と人』めぐり No. 7～九州『川と人』めぐり～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 生命環境科学研究科 博士前期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

### 『川と人』めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしょうがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。

### 1. 10泊11日の九州『川と人』めぐり

2012年10月19日から29日にかけて調査で川と人めぐりをするようになった。私の研究では『河川市民団体の活動量の定量的分析』と題して、各流域どれくらいの市民活動のパワーをもっているかを今まで目にみえなかったものを活動量として表してみるとところに魅力があると思っている。活動量には2つあって、どれくらい川に対して市民活動によるお金を投資しているかを示す『金銭的エネルギー』とどれくらい川に対して人と時間をかけているかを示す『人的エネルギー』の2つの軸がある。これらを得るためには直接市民団体の人から活動の情報を聞き取ることが重要で、お願いをする必要がある。私の野望としては109水系だが、まずは手始めに自身が馴染み深い九州の各流域の市民団体の人を訪ねていくことにした。計画としては表1のとおりだ(表1)。福岡(遠賀川, 筑後川, 矢部川)→熊本(菊池川, 白川, 緑川, 球磨川)→鹿児島(川内川, 肝属川)→宮崎(大淀川, 小丸川, 五ヶ瀬川)→大分(番匠川, 大野川, 大分川, 山国川)とめぐり、20河川中、16河川を巡る。

表1 九州『川と人』めぐり訪問先

日にち	午前	午後	訪問先
10月19日(金)		遠賀川	堀川再生の会・五平太
10月20日(土)	遠賀川	筑後川	NPO法人遠賀川流域住民の会 NPO法人直方川づくりの会 筑後川フェスティバル(九州河川NPO会議)
10月21日(日)	筑後川	矢部川	筑後川フェスティバル 柳川
10月22日(月)	菊池川	白川	菊池川河川事務所 竜門ダム管理所 熊本河川国道事務所 本荘校区自治協議会
10月23日(火)	白川	緑川 菊池川	白川わくわくランド 緑川情報室 天明水の会 菊池川流域連携会議
10月24日(水)	球磨川	球磨川 川内川	八代河川国道事務所 球磨川水系ネットワーク 川辺川ダム砂防事務所 川内川流域連携ネットワーク
10月25日(木)	川内川	肝属川	川内川河川事務所 大隅河川国道事務所 こうやま川川の少年団 始良川河川愛護会 肝属川水辺館
10月26日(金)	大淀川 小丸川	五ヶ瀬川	宮崎河川国道事務所 NPO法人大淀川流域ネットワーク 大淀川学習館 リバーバル五ヶ瀬川 延岡河川国道事務所 延岡市役所 アースデイのべおか実行委員会
10月27日(土)	五ヶ瀬川	五ヶ瀬川	北川流域ネット NPO法人五ヶ瀬川流域ネットワーク イナカDEイカス イナカWOイカス成果発表会
10月28日(日)	五ヶ瀬川	番匠川	リバーバル五ヶ瀬川 番匠おさかな館
10月29日(月)	大野川 大分川	山国川	ななせ交流会 大分河川国道事務所 大分川ダム工事事務所 山国河川事務所 豊前の国建設倶楽部

### 2. 遠賀川

#### 2-1 堀川再生に向けて(堀川再生の会・五平太)

1日目。夕方福岡空港に到着。普段なら実家に帰るところだが、少し寄り道。堀川再生の会・五平太の会長の中村恭子さんに再会。中村さんは長年、遠賀川水系の堀川(中間市, 水巻町, 北九州市を流れる)の再生に向けて取り組まれてきた方で、水がほとんど枯れてしまっている堀川に当時のような五平太船の浮かぶ舟運景観が復活するのを夢見て活動している(現在は水量確保が課題)。小学生に堀川の歴史を教えたり、EM団子を投入し、絶対的水量の不足からくる水質悪化を少しでも抑制しようとしていたりしている。最近では堀川のあらゆる情報をまとめた本も執筆されている(遠賀堀川とをりを-記録・記憶・そして願い-)

折尾駅の改札を出て、中村さんに案内されたのは夜の堀川。「この飲み屋街に沿って流れる夜の堀川がまたいいでしょう?」飲み屋街の明かりに照らされる堀川は幻想的で美しかったが、折尾駅再開発計画でこの風景が消えつつあるのは少し残念だ。

また堀川は経済産業省認定の近代化遺産に登録されており、現在は九州近代化遺産群のひとつとして世界遺産への登録を目指している。しかし中村さんは言う。「堀川にもっと水が流れるようになってくれれば私はいいと思っているの。」中村さんらは2013年5月ごろに堀川再生シンポジウムを開くことを計画している。堀川に水が流れ、再生の日も近い。

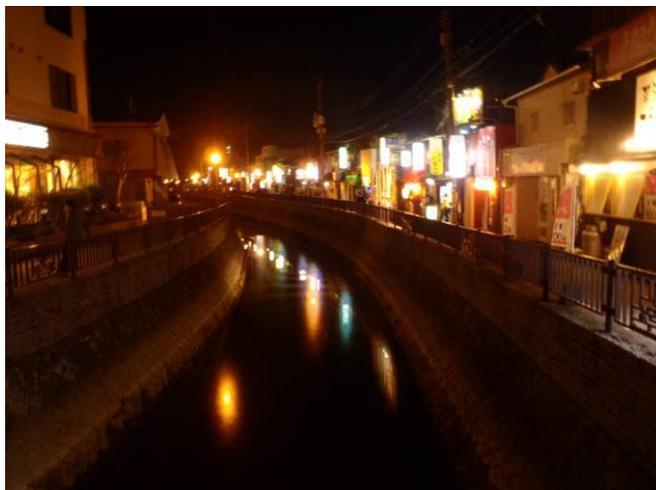


写真1: 折尾駅付近の夜の堀川(正式には新々堀川)

## 2-2 遠賀川の再生を遠賀川流域住民で (NPO 法人遠賀川流域住民の会)

1 日目の夜は実家に帰り、短い帰省を終え、早朝には出発。仏壇の祖父に手を合わせ、旅の安全と実りあるものになるように願う。

2 日目。2 団体目は福岡県飯塚市に拠点を置く NPO 法人遠賀川流域住民の会。理事長の窪山邦彦さんが対応して下さる。遠賀川流域住民の会は遠賀川の河口堰にたまるゴミ問題に問題意識を持ち、上流と下流全ての遠賀川流域住民が同じ共通意識を持って遠賀川再生に向けて取り組もうと活動をはじめた流域連携を意識した会だ。「I LOVE 遠賀川」のキャッチコピーをもとに、一万人以上の人々が清掃活動に参加する仕組みを確立しており、ごみ問題解決に向けたムーブメントになっている。

そんな会なので、流域の各団体の情報収集はよくされており、遠賀川流域の活動団体 77 団体をまとめた冊子をまとめている。冊子の内容と同じものを遠賀川河川事務所のHPでもみることができる。

(<http://www.qsr.mlit.go.jp/onga/withus/index.html>) おそらく、九州の流域の中でもここまでしっかり、各団体の活動を情報収集しているのはここだけだろう。(市民団体の把握状況は各河川事務所によってもばらばらで、リストはもちろん、把握すらできていない流域の事務所も多くある。)

私の調査シートをお願いをさせていただくと、遠賀川流域住民の会の機関誌の送付時期に各団体にも調査シートに応じていただけるように一緒をお願いをしていただけるとのことだ。

話が終わり、外に出ると、河川敷ではマラソンが行われていた(写真2)。秋の快晴の空のもと、川沿いを走る姿は本当に絵になる。滔々と流れる秋の遠賀川を見て、次の約束池へ急ぐ。



写真 2：秋晴れの遠賀川の河川敷

## 2-3 夢プランで次世代の遠賀川のために (直方川づくり交流会)

飯塚市を後にし、少し下流にある直方市遠賀川水辺館(写真3)に到着。ここは私のホームグラウンドであり、私の活動の原点の場所だ。遠賀川水辺館は指定管理者制度で運営されており、NPO 法人直方川づくり交流会が管理委託を受けている。この水辺館を提案したのが直方川づくり交流会であり、夢をかたちにした。16 年間会を引っ張ってきたのが、座長である(NPO は理事長)の野見山ミチ子さんだ。野見山さんは平成 8 年に直方川づくり交流会を立ち上げ、50 年後の遠賀川を子供達に受け継ぐため何かできることはないかと活動を始められ、自身らの「夢」を夢プランとして行政に発信し、想いをかたちにした。会員全員でスイスに近自然河川工法を勉強に行き、いち早く、遠賀川の川づくりにも取り入れたいと行政に提案してできたのが新町護岸(勘六橋上流)である。その他にも導流堤の上に「春の小川」の実験河川を提案したり、遠賀川の拠点になる水辺館を提案したり、次々と提案をされている。今では、赤ちゃんから小学生、中高生、大学生、大人が集まるグループが形成されていて、大変賑わう場になっている。

久々に水辺館に立ち寄った私は里帰り気分であれなかった。野見山さんはお変わりなく、いつものように温かく迎えてくれた。

近況報告や自身の研究のご協力をお願いをしている時と野見山さん。「いろんなところを旅して、鮭のように大きくなっていつか帰ってきておいで。」野見山さんと水辺館で話した時間は一時間に満たない時間だったが、会うといつも元気をもらう。今からはじまる九州川めぐりのエールとして胸に刻み、遠賀川をあとにした。



写真 3：住民の夢で実現した水辺館と周辺(春季)

### 3. 筑後川

#### 3-1 九州中の NPO が筑後川に集う日

##### (NPO 法人筑後川流域連携倶楽部)

遠賀川を後にし、電車で久留米市へ。ここからは筑後川流域。今日から2日間筑後川では筑後川フェスティバルが開催され、筑後川の市民団体はもちろん、九州各地から団体が集まる九州河川 NPO 会議（写真4）というものが開催されていた。NPO 法人九州流域連携会議というものが、そこに加盟ないし、交流がある人が集まっている。これを逃す手はなく、会場へ向かった会場につくと、知った方ばかり。邪魔にならないように、ギャラリー席に座ろうとすると、「坂本君！待ってたよ！」と見学に行くとしか言ってなかったが、なぜか僕の席が会議の一角に用意されていた。今回の会議のテーマは防災で、今年被害のひどかった北部九州の大雨を事例にどのように九州の各流域で連携をとって減災活動を実施するか議論がされていた。近年大雨の多発する九州にとっては緊急重要課題である。会議の終了時に私の研究を説明する時間をいただき、調査シートをお願いした。会場の皆さん「いいよー！うちの流域は俺にまかせといて。」の一言で快諾。今から各流域、お願いして周るのに、こんな簡単に快諾もらっていいものか少し戸惑ったが非常にありがたい。

会議が終了し、夜は旅館で『夜鍋談義』が開催される。いわゆる立食パーティだが、食べる時間を惜しんで、あらゆる筑後川の団体の人に研究協力をお願いして周る。このフェスティバルの運営主体は NPO 法人筑後川流域連携倶楽部（理事長：駄田井 正）で、筑後川の流域連携づくりはもちろんのこと、坂東太郎、筑紫次郎、四国三郎の異名をもつ利根川、吉野川を呼んで、暴れ川つながりの交流も行っているパワフルな団体だ。あらゆる連携をつくることで流域圏の活性化を目指しており、ユニークな活動である。



写真4：九州河川 NPO 会議の様子

#### 3-2 船で筑後川の河口へ

##### (NPO 法人大川未来塾)

九州川巡り3日目。筑後川の昇開橋のある諸富港から筑後川河口のクルージング船に乗れるというので、参加。4月に筑後川にきてこの場所にもきたが（5月号参照）、船から昇開橋やデ・レイケの導流堤をみることができる（写真5）。雄大な筑後川の河口を船で下る。船の中では利根川、筑後川、吉野川の人らが一緒に船旅を楽しんでいた。また、盲目の演歌歌手、牧山ひろしさん（一期一会の歌い人）が筑後川の曲を披露されており、船旅を演出している。

この船旅の運営をされているのが今回の筑後川フェスティバルの運営母体の一つである、NPO 法人大川未来塾の方々だ。大川未来塾は筑後川の河口に位置する大川市を拠点に家具の街大川市の活性化を目指して、活動をされており、まちづくりリーダーの育成を目指している。私たちが快適な船旅ができるように当日の運営をはじめ、色々と準備をしてくださっている。筑後川の活動が活発なのはこういう団体がいくつかあり、互いに協力しているからだと思う。

降りてからは、筑後川フェスティバルの本会場である、佐野常民記念館に向かった。（佐野常民とはご存じのとおり、博愛主義を提唱し、日本の赤十字の原型をつくった人物である。）会場は筑後川のほとりであり、そこで、物産市やコンサートなどが行われていた。そういえばこういう詩をきいたことがある。

まさにこのことだ！（遠賀川水辺館に展示あり）

川は洪水対策や水の利用だけでなく  
人々が集い賑う物であってほしい  
川で絵を描き詩を詠い音楽を奏で  
自然を学びお祭りをして さまざまなボランティア  
活動の場としたい  
文化の香りがする〇〇川流域でありたい



写真5：筑後川遊覧船と昇開橋

#### 4. 矢部川

##### 矢部川流域の橋渡し

###### (矢部川をつなぐ会/水の会)

少し時間は前後するが2日目の夕方、矢部川をつなぐ会の方にヒアリングをすることができた。会長の松富士将和さんにお話を伺った。この会は矢部川流域の単独で行われていた活動を一つにつなごうと2005年に設立された。現在は9団体が加盟している。『ゆつら〜っと矢部川』を合言葉に多くの人々が矢部川流域に訪れるようなリバーツーリズムのような企画やゴミマップ作成をし、環境美化にも精力的に取り組んでいる。そんな矢部川をつなぐ会だが、もともと呼びかけの中心になったのが、柳川市の掘割で活動する『水の会』の活動がある。水の会は「いい川・いい川づくりワークショップ」の広松伝賞で有名な故 広松伝さんが設立した団体である。1997年に掘割の埋め立て計画が、自らが務める柳川市の下水道の部署で持ち上がった。内部者でありながら、掘割を埋めてはいけないと市長に直談判し掘割埋め立てに待ったをかけた。掘割を埋めれば、有明粘土層の上に成立している柳川のまち全体が地盤沈下してしまうことを知っていたことはもとより、貴重な水文化を消失することを知っていた。これをきっかけに水の会を設立し、長年にわたり掘割の浄化運動を続けてきて現在の柳川がある。スタジオジブリ作成の「柳川掘割物語」が明るい。そういう経緯をもつ水の会のメンバーがいたからこそ、矢部川をつなぐ会は実現したと思う。広松さんの後継者として、水の会の事務局長をされていた故松石めい子さんが力を入れてつくったのもこの矢部川をつなぐ会だった。そんな想いの上にこの会はできている。3日目の午後に少し柳川に寄る時間があつたので、1時間ばかり、掘割で川下り船に乗った(写真6)。柳川・矢部川流域の情緒は今もここに確かにある。



写真6：柳川の川下り

#### 5. 菊池川

##### 菊池川流域の賑わいを取り戻すために

###### (菊池川流域連携会議)

4日目。いよいよ熊本入り。熊本には1級水系が4河川あり、そのうちのもっとも北に位置するのが菊池川で、菊池市、山鹿市、玉名市などを流れる。まずは菊池川河川事務所へ行き、情報収集。事務所の方に研究の趣旨を説明し、情報提供いただいた。菊池川流域には菊池川流域連携会議という流域連携ネットワークがあり、そこに10団体程度が加盟しているという。明日の夜ちょうど、流域連携会議の集まりがあるらしいので、それに参加して代表者と直接交流できることになった。

明日の夕刻にまた菊池川流域に来ることを約束し、事務所をあとにした。少し時間があつたので、竜門ダムを見学した。なぜかヤギが迎えてくれた(写真7)。ダムサイト周辺は紅葉がはじめていた。

時間は少し進むが、5日目の夜、菊池川流域連携会議の方にお会いした。菊池川流域連携会議では、平成10年に、九州でいち早くリバーツーリズムを導入し、川を題材とした観光の試みを実施したという。これは九州地方整備局が打ち出した九州川の魅力再発見プロジェクトの3本柱であるリバースクール、リバーツーリズム、川の情報室の一つであり、九州の川づくりにおいても重要な意味をもっている。菊池川流域連携会議の代表の山崎寿雄さんのお話によると、まずは地域の活性化を目指すということでこの取組みを始められたという。また、菊池川流域連携会議をサポートする会としてできたのが「かわんたみ」(本山幸嘉さん)であるとはいう。その他にもBODが25の畜産による水質汚染の課題が残る合志川河畔をきれいにする会(蒲原進二さん)や七城環境ネットワークなどさまざまな会が菊池川の流域で活動している。絆の固いネットワークに感じた。

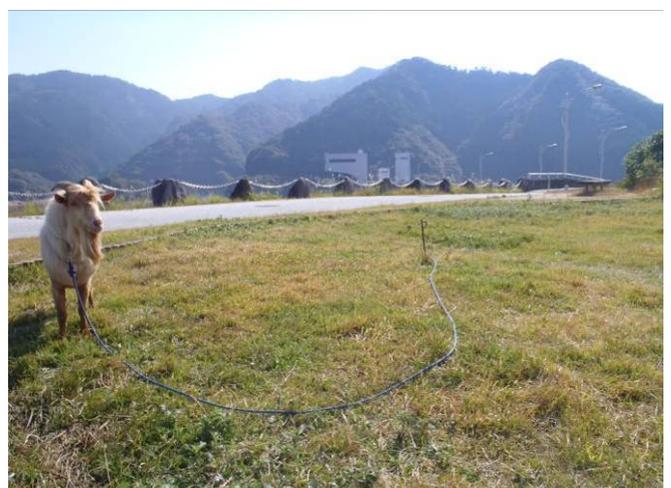


写真7：ダムサイトでむかえてくれたのはヤギ

## 6. 白川

### 白川流域の防災力向上へ

#### (NPO 法人白川リバーネットワーク)

菊池川を後にし、白川に到着。阿蘇の外輪山より流れ出て、熊本市内の中心地を流れる川だ。熊本河川国道事務所で白川と緑川の市民活動の状況等をお聞きした。最近では国土交通省の部署にも地域連携課というものがあり、地域連携を重視しているのがうかがえる。またこの時お話しいただいたのが、今年の夏の大雨の話。龍田地区で計706棟、が全半壊や床上・床下浸水、阿蘇では大規模土砂災害が多発したという。「いかにすごかったかはリバーネットワークの方からもきけるとおもいますよ。」

その後、リバーネットワークの会員であり、本荘校区自治協議会の榮そのみさんを訪ねた。榮さんの家の付近も井手が満水近くなり、これ以上降るとあふれるというところまで来たそうだ。榮さんは日頃から白川リバーネットワークで活動して想定していた自主防災活動を活かすべく、ご近所に「このままじゃ危ないから早く非難しよう！」と呼びかけてまわったという。しかし、みんな「うちはまだ大丈夫」と逃げる人は少なかったという。リバーネットワークで自主防災を掲げて活動してきたのにまだ課題はあったようだ。

5日目午前。今度は白川わくわくランドを訪ねた。リバーネットワークの事務局の谷光承が対応してくれた。今日は小学生がわくわくランドに白川流域について勉強にくるといので、見学させてもらった。今日は一日かけて白川流域を周るそうで、スクリーンで白川の流域の概要をみて、この川があふれるとどうなるかを学んでいた(写真8)。谷さんら事務局の方はいかに水害が恐ろしいかを分かりやすくお話しされていた。小さい頃からの防災教育でしか本当の意味での防災力はつかないと実感した。



写真8：白川わくわくランドでの防災教育

## 7. 緑川

### 緑川一斉清掃がつくりあげた強固な連携

#### (NPO 法人緑川流域連携会議/天明水の会)

白川流域をあとにし、午後からは緑川へ向かった。ところどころに湧水の湧き出ている池があり、美しい景観が広がっている。緑川情報室へ到着。緑川流域連携会議の事務局を務める岡裕二さんにお会いした。緑川流域連携会議のはじまりは民間主導ではじまった精霊流し後の緑川一斉清掃で、緑川の清流を取り戻す流域連絡会として平成4年に35団体でスタート。2年目以降、一斉清掃に行政が追随するかたちで広がりを見せ、現在では今年で19年目を数え、約2万人が一斉清掃に参加をしている。「川は人をつなぐ手段です。」と岡さん。地域をよくしたいと考えた末に手段として行き着いたのが緑川だったという。

また、緑川流域の連携は一斉清掃だけにとどまらない。上下流の交流が非常に重要と岡さんは続けた。「川は地域をうつす鏡です。河口をみれば一発でその流域の品位が分かる。」これにはギクリとした。わがふるさとの遠賀川流域も河口堰には大量のゴミがひっかかっている。

上下交流の経緯をもっと知るべく緑川流域連携会議のコアメンバーであり、NPO 法人天明水の会の濱崎勝会長の自宅を訪ねた。濱崎さんによると、1980年代以降、アサリの漁獲が大幅に減り、漁業に課題がでてきたという。一雨降ると養分が海に流れてきていたのがなくなったのが原因と気づいた漁師達は源流部に植林をはじめた。これが流域連携のもう一つの要因である。現在は林野庁と分収増林の計画を立てて、植えた年から80年後に国：民＝2：8で利益配分することになっている世代を超えた壮大な計画がある。緑川河口に沈む夕日(写真9)に黄昏れつつ、いつまでも海に大漁旗が揚がることを願い、緑川流域をあとにした。



写真9：緑川の河口に沈む夕日

## 8. 球磨川

### 球磨川流域住民の選択

#### (球磨川水系ネットワーク)

6 日目。旅も折り返しだ。八代河川国道事務所訪問後、約束をしていた球磨川水系ネットワークの事務局の右田いくみさんにお会いする。右田さんとの待ち合わせの場所は新萩原橋付近の球磨川河川敷。まず案内されたのは河畔林。木陰があり、水際までアクセスできるこの場所は荒れ放題の草地を手入れして、川の近くでお弁当を食べたり、休んだりできるようにしたいと有志の作業によって立派な木陰ができあがった。「お金をかけずに何かをしたいと思って、助成金とかお金をもらって活動するのもいいけど、助成金をもらうこと、使うことに迫られて、ある時楽しくなくなっている自分があることに気づいて。」こういう経緯もあり、球磨川水系ネットワークは敢えて法人化の道をとらずにやってきたという。

右田さんに案内していただき、上流に上っていくと、撤去中の荒瀬ダムがあった(写真 10)。湛水期間だったところは瀬が形成されており、ここが湛水していたとは思えない不思議な光景だった。

さらに上流へ移動し、球磨川の支流の川辺川へ。川辺川の河原に降り、美しく緑色に透き通った水を見つめながら右田さんが話し始めた。「川辺川、きれいでしょ？川辺川ダム開発は止まったけど、賛成派も反対派も中立の私達球磨川水系ネットワークも今までみんな苦しかった。結果的に私達住民はダムはいらないという選択をした。けどもし、この流域で水害が起きても、流域の住民は国交省のせいにははいけないと思うの。それは私達が住民の人に伝えていかなきゃいけないの。」これには本当に心を打たれた。ダムが良い悪いではなく、住民がリスクを承知でそういう選択をしたということが考えさせられた。まだ書きたいが字数の関係で別の機会に。



写真 10：荒瀬ダム撤去の現場

## 9. 川内川

### 大水害から 6 年

#### (川内川流域連携ネットワーク)

球磨川を後にしたのは日が暮れてからで、川内川へ急いだ。「よう！待ってたぞ！」と声をかけてくれたのは川内川流域連携ネットワークの事務局の上野豊さん。久々に再会。上野さんと最初に出会ったのは僕が大学一年の夏休み。初めての里帰りです賀川水辺館に顔を出した時、川内川流域が豪雨災害で被害を受けた連絡が上野さんからはいり、夏休みで時間に余裕のあった僕ら学生が復旧支援に行くことになったのが最初だ。それ以来、2006年10月の川のワークショップや2007年5月の再訪問や2009年3月の大学生等活動交流会など度々訪問してきたが、今回は久々だ。水害後すぐに大学生の災害ボランティア根とワーク JOC (Joint of College) を立ち上げ、九州各地で大学生の川仲間を増やしていった。そんな川内川水害から6年経った。大学一年の頃に「何か役に立ちに行きたい！」と想った熱い気持ちがよみがえってくる。初心を何度でも思い起こさせてくれる大切な場所だ。

上野さんとの雑談の中で、これからの地域行政のあり方の話がでた。「川内川は宮崎と鹿児島にまたがって流れている。またいくつもの市町村も。いっそのこと、流域単位で自治をやればうまくいくと思わないか？」たしかに流域は古くから文化圏としても共通性が高いし、なにより水収支の管理がしやすくなるから治水対策も効率よさそう。空想に話をふくらませながら川内川の夜は更けていった。

7 日目。川内川河川事務所を訪れ、活動に関してお話を聞いていると、防災活動のほかに環境学習の活動が非常に盛んな流域なようで、事務所はじめ、川内川流域連携ネットワークも行っている(写真 11)。ここで育った子供はどんな大人になるのか楽しみだ。



写真 11：環境学習の様子(上野さん提供)

## 10. 肝属川

### 九州ワースト1を争う肝属川

(こうやま川の少年団/始良川河川愛護会)

川内川を後にし、鹿児島市から船で大隅半島へ渡る。大隅半島には日本最南端の一級河川、肝属川がある。肝属川は九州ワースト1の水質を遠賀川といつも争う河川で、名前こそ聞いたことがあったが実際に来るのはこれが初めてだ。

事前の調査では肝属川流域には2団体しか市民団体を見つかることができなかった。肝属川流域の市民活動の実態を知るべく肝属川河川事務所へ、色々とお話しを伺ったが事務所が把握しているのも始良川河川愛護会とこうやま川の少年団だけのようだ。

まずはこうやま川の少年団を訪ねた。この団体は肝属川の支流の高山川で子供達を中心に活動する団体で、肝属町教育委員会の中に設置されているようだ。なので、最終的には私の河川市民団体の定義からは外れるのだが、大変興味深い名前だった。『川の少年団』こんなセンスのいいネーミング誰が思いつくのだろう。川の少年団の事務局の永井紘俊さんにも他に活動団体を知らないか伺ったが分からず。この「肝属川水系は少し上流にいけばたくさん川遊びできる川があって、自分らが子どもの時から川は遊ぶものと思っていたので、わざわざ活動という風に意識しないのではないか」とおっしゃっていた。

もう一つの団体、始良川河川愛護会にも伺い、お話しをきいた。この会は昭和56年に発足し、クリーン作戦やアユやウナギの放流に力を入れてきている。こちらの会は肝属川水系は汚いと認識されているが、川のどこで向き合っているかも市民活動に大きく影響しそうだ。また、鹿屋市で水辺館という建物があると聞いて尋ねた。名前はそのまま肝属川水辺館(写真12)。遠賀川水辺館開館の1年後(2005)にできており、なんとなく親近感がわいた。



写真12：肝属川水辺館

## 11. 大淀川・小丸川

### 母なる清流求めて/小丸川流域の謎

(NPO 法人大淀川流域ネットワーク)

8日目。旅もだいぶ終盤だ。宮崎市内に突入し、大淀川を訪ねる。宮崎市内を滔々と流れる大きな川だ。大淀川には大淀川流域ネットワークがあり、宮崎河川国道事務所の方に事務局の場所を教えていただいた。

残念ながらこの日は代表の杉尾哲先生(元宮崎大教授)がいらっしやらないのと、事務局の方が立て込んだイベントで大変お忙しいとのことで、ご挨拶だけをしてきた。

せっかく大淀川にきたので、大淀川学習館にも少し立ち寄る(写真13)。とにかくこの学習館よりも大きく、図書室、展示室、実験室、中庭など様々な設備がそろっており、さらに学芸員の方が常勤でいる博物館機能をもった施設だ。この日はちょうど、子供たちがきていて環境学習をしていた。

大淀川はまた今度ゆっくり来てお話しをきくことにし、宮崎県を北上し、五ヶ瀬川流域を目指す。五ヶ瀬川流域と大淀川流域の間に小丸川というあまり聞かない名前の1級河川がある。しかしながらこの流域は市民団体の活動の実態が分からず、調査できず。九州には1級水系が20河川あるのだが、この流域だけまったく情報につかめなかった。本当に活動実態がないのか、あるいは私が知らないだけなのか。市町村で言うと、日向市や高鍋町などを流れているが、もしどなたか情報を持っている方いたら教えていただきたい。



写真13：大淀川学習館

## 12. 五ヶ瀬川

イナカ de イカス イナカ wo イカス

(NPO 法人五ヶ瀬川流域ネットワーク/北川流域ネットワーク)

8 日目午後、延岡市に到着。まずは五ヶ瀬川の学習館、リバーパル五ヶ瀬川へ。この学習館は NPO 法人五ヶ瀬川流域ネットワークが指定管理者として管理している。リバーパルは北川と友内川の合流点にあり、友内川水門の埋め立て地内にある。館からみる芦原が美しい。

リバーパルのスタッフであり、ネットワークの事務局である山田大志さんに五ヶ瀬川流域ネットワークが持つ情報はもとより、各行政の市民団体の窓口に同行していただき、調査のサポートをいただく。年が近いこともあり、兄貴分的に非常に親しみやすい。

今まで強行軍で他の流域を巡ってきたが、五ヶ瀬川流域には今日から別目的もかねて 2 泊 3 日する。五ヶ瀬川といえば天孫降臨の地、高千穂峡で有名だが、今回は支流の北川が舞台。私の所属する白川研『川と人』ゼミのメンバーが宮崎県の新しい公共支援事業の一環で「イナカ de イカス イナカ wo イカス」というユニークなプロジェクトで、北川流域を活かしたまちづくりの提案につなげるのが狙いで、関東近郊の学生を募集し、卒論や修論フィールドとしても提供している。このプロジェクトを中心となりコーディネートして下さったのがリバーパルの館長であり、ネットワークの理事長の土井裕子さん。現地でも私達それぞれの目的にあった活動のサポートはもとより、あたたかく歓迎をしていただいた。また北川流域ネット代表の矢野純一さんは翌日にカヌーで祝子川を下る企画を開いてくださったり、流域の案内をしてくださったりと短い期間ではあったが様々な体験をさせていただいた(写真 14)。

皆さんも行楽の秋、天孫降臨の川、五ヶ瀬川流域の中でも一際透き通った清流、北川に行ってみてはいかがでしょうか。



写真 14 : カヌーで祝子川(五ヶ瀬川水系)を下る

## 13. 番匠川・大野川

ネットワークが機能しなくていい仕組み

(番匠川流域ネットワーク/大野川流域ネットワーク)

10 日目午後、五ヶ瀬川流域を後にし、大分県に突入。大分県には南から番匠川(写真 15)、大野川、大分川、山国川の 4 つの 1 級河川がある。車窓から秋の風景に色づく番匠川がみえる。

番匠川にある番匠おさかな館(9 月号で紹介)を訪ねる。おさかな館は国道 10 号線沿いの道の駅やよいに併設された施設。番匠川流域ネットワーク事務局長の平野憲司さんにお会いする。私は初対面だと思っていたが、九州「川」ワークショップなどで私が発表をしたのを覚えてくださったらしく、「学生の川のネットワークをつくってくれてありがとね。」とっていただいた。

番匠川流域ネットワークは平成 13 年に設立されたが、もともと大分県が打ち出した一村一品運動の際にまちづくり活動の基盤があったので、ネットワークの設立は非常に円滑に進んだという。発足から 10 年以上が経ち、現在のネットワークの活動を訪ねたところ、現在はほとんどネットワークが主体となって機能することはないという。というのは、ネットワークは現在までつなぐ役割に重きを置いてきたが、それぞれの団体が必要に協力し合う体制が確立できているので、流域ネットワークで見守るだけで、うまくネットワーク化できているという。日本の河川再生を目指す JRRN もつなぐという役割の面においては最終的にはこのような形態になればベストだと思う。

また、本来ならこの後、大野川流域ネットワークの幸野さんにお会いしてお話しをお聞きする予定だったが、ご都合が合わず。またの機会に大野川の河童小屋などの話は紹介したいと思う。



写真 15 : 秋色の番匠川

## 14. 大分川

### 生まれたばかりの川活動の流域

#### (大分川「ななせ交流会」)

九州『川と人』めぐりも最終日。長かったようであつというまだった。最終日は大分市内からスタートし、大分川を訪ねる。大分川の支流に七瀬川という川があるが、ここにななせ交流会という会がある。実はこの会、昨年できたばかりの生まれた。活動1年目にも関わらず、かなりの活動頻度で勢いのある会だ。「ななせ館」(写真16)という七瀬川の施設があり、そこを拠点に活動している。会の代表の矢野多美子さんらとお話しをしていると、「私達去年、遠賀川の直方川づくり交流会というところに見学に行ったんですよ！色々不安でしたが、女性がリーダーの会で、しかも15年以上活動している人たちがいると聞いて勇気づけられました。」直方川づくり交流会には年の離れた妹ができた。

実はこの会の立ち上げに尽力した国交省の方がいるが、両方ともその方が立ち上げに関わっている。いわゆる仕掛人だ。大分川は長年、川の市民活動がなく、活動の乏しい地域だったが、その現状を一緒に変えていこうと話をもちかけたのが、その方。(さらに九州流域連携会議をつくる際に後押ししたのもその方。九州の市民団体にとっては強力な応援団だ。)

地域を変えたいという女性、それを後押しする行政マン、拠点となる施設、同じような条件を持ったななせ交流会だが、今後どういう風になっていくか非常に楽しみだ。新しく生まれたばかりの活動が大分川で根付く日も近い。

流域の河川事務所など車で連れて周って下さった会の方々に感謝申し上げる。



写真16：ななせ館

## 15. 山国川

### 変化する市民活動

#### (豊前の国建設倶楽部/NPO 法人レスキューサポート九州)

大分市内を出発し、山国川へ。今回の旅の最終目的地となる。

豊前の国建設倶楽部の木ノ下勝矢さんにお会いする。木ノ下さんの団体の活動の歴史は九州の中でも大変長く、1984年からスタート。(当時木ノ下さんは30代だったそうだ。)

江戸時代にはもともと豊前として一つの国だったのが廃藩置県により、山国川を挟んで大分県と福岡県に分断されてしまった。山国川を挟んで背中を向いてしまった地域を一つにしようとして行政界の枠を越えて活動しようとして長年地域おこしに尽力されてきている。(すなわち今発足10年目前後を迎えようとしている団体が歩んだプロセスを20年近く前に経験している。)

木ノ下さんの団体が最近特に力を入れているのが、防災・減災活動。山国川流域も今年大きな被害を受けた。地域の減災力を高める仕組みが確立されていないことに加え、視覚・聴覚障害者の人が非常時にどう対応したらいいのか、どう手助けをしたらいいのか仕組みがない。これをどうにかしてこの地域でモデルケースをつくり、全国の減災計画を変えていこうと1999年に立ち上げていたNPO法人レスキューサポート九州に防災活動を担わせ、NPO法人だった豊前の国建設倶楽部を普通の任意団体に戻し、活動の中心をレスキューサポート九州にシフトさせた。NPO法人化していく例はよく聞くが、任意団体に戻すというのは聞いたことがなかった。「活動も年とともに変化している」という言葉には長年のキャリアゆえの説得力があった。

山国川河川事務所に連れて行って下さった上、空港まで送っていただきありがとうございました。



写真17：水害後土砂のたまった山国川(平成大堰)

## 16. 旅の終わりに

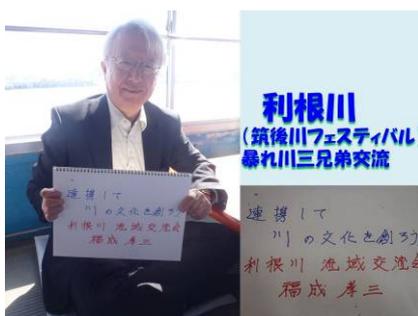
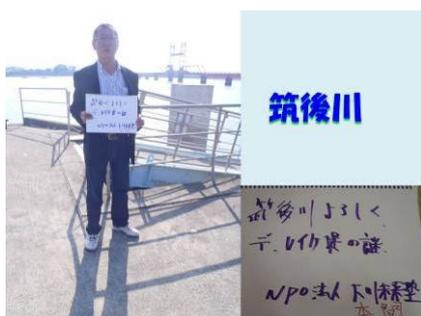
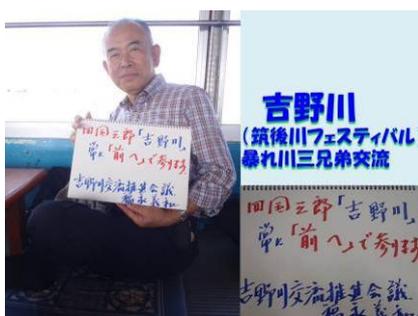
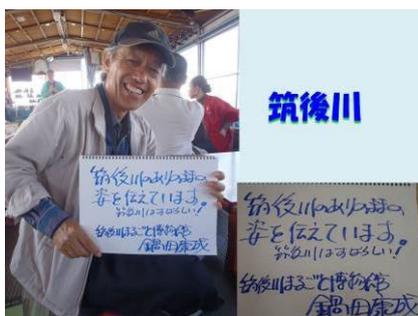
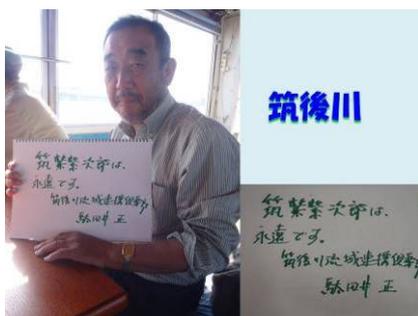
この旅で名刺交換した人だけで50人以上。初対面でない人も合わせると相当な人数の方にお会いしたことになる。河川事務所を周るのが円滑に行くようにと各事務所にあらかじめ連絡を入れて下さったSさん。

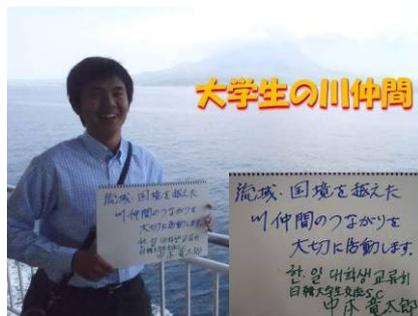
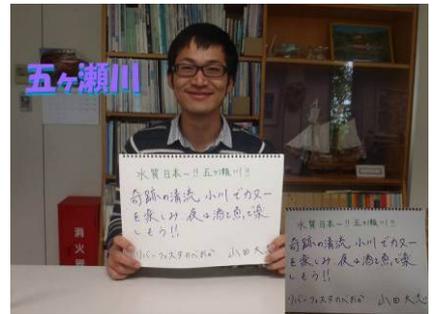
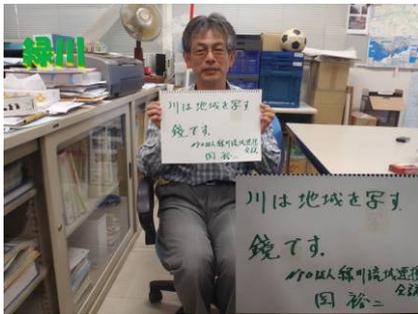
以前より川仲間の大学生の協力も多くあった。筑後川流域を対象に同じ市民団体の研究をしていた久留米大学の張智樹君は筑後川流域の団体との調整や今後の調査シートの回収を申し出てくれた。

また東海大学の中本竜太郎君は南九州の地理に詳しいからと白川・緑川の団体との事前調整はじめ、熊本、鹿児島、宮崎3県をつれて周ってくれた。遠賀川で一緒に活動していた刀禰洗太君も勤務先の大分で対応してくれた。また白川研の『川と人』ゼミの愉快的な仲間と北川の思い出を共有できたのもうれしかった。

他にも数多くの方に温かいご支援とご協力をいただき、10泊11日の旅を終えることができました。この場を借りて深く感謝を申し上げます。

最後に旅先で川仲間からスケッチブックにいただいたメッセージを一挙紹介して、今回の九州『川と人』めぐりを終わりにします。長い駄文にお付き合いくださった読者の皆様もありがとうございました。







## 水辺からのメッセージ No.42

国土文化研究所 特任研究員 岡村幸二 (JRRN 会員)

### ガーデニング & 水路： 陽の当たる開放的な親水空間にはガーデニング植栽がよく似合う



撮影：2011年11月（東京都・世田谷区池尻）

#### ◆緑道というよりはまちのニワの表情

池尻大橋から三軒茶屋まで延々と続く緑道ですが、水辺の植栽は多様に変化していきます。水面は歩く人にも近く、流れは可能なかぎり浅くゆるやかです。地域の人たちが、植え替えや清掃などに日常的に関わる様子が見られます。

※世田谷区の緑道は16本15haが完成（2006）

※国土文化研究所は、株式会社建設技術研究所のシンクタンク組織です。

#### ■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。（JRRN 事務局）

**【JRRN 会員からの提供情報】**

■『ミツカン水の文化センター第 9 回里川文化塾「水の郷・日野を歩く～用水路を活かしたまちづくり～」(11/10 開催)

ミツカン水の文化センター定期開催行事のご案内を頂きました。

- 日時：平成 24 年 11 月 10 日 (土)
- 会場：七生 (ななお) 福祉センター
- 主催：ミツカン 水の文化センター
- ◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/804.html>

**【JRRN 会員からの提供情報】**

■「河川文化を語る会」

JRRN 団体会員である公益社団法人日本河川協会から河川文化を語る会のご案内です。

【第 173 回】

- ◆テーマ：火と水の祭典 天神祭
- ◆講師：岸本政夫 氏 (大阪天満宮禰宜)
- ◆日時：2012 年 11 月 29 日 (木) 18:30～20:30
- ◆場所：エル・おおさか (大阪府立労働センター)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/796.html>

【第 174 回】

- ◆テーマ：多摩川源流の魅力と価値、その可能性を語る
- ◆講師：中村文明 氏 (多摩川源流研究所 所長)
- ◆日時：2012 年 12 月 14 日 (金) 18:00～20:00
- ◆場所：厚生会館 (全国土木建築健保)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/807.html>

【第 175 回】

- ◆テーマ：近年の気候変動と将来の気候変化
- ◆講師：鬼頭昭雄 氏 (気象庁気象研究所)
- ◆日時：2013 年 1 月 22 日 (火) 18:00～20:00
- ◆場所：厚生会館 (全国土木建築健保)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/824.html>

◆申込/問い合わせ：公益社団法人 日本河川協会  
 TEL：03-3238-9771 FAX：03-3288-2426  
 E-mail：kataru@japanriver.or.jp  
 URL：http://www.japanriver.or.jp/

**【JRRN 会員からの提供情報】**

■『～宇治川探訪、鴨川探訪、淀川探訪 出版記念～フォーラム「千年の古都を支えた水～京都盆地の水瓶と3つの河川～」(11/10 開催)



JRRN 団体会員であるカップ研究会より講演行事のご案内を頂きました。

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/812.html>

**【JRRN 会員からの提供情報】**

■「第 15 回 河川生態学術研究発表会」(11/30 開催)



JRRN 団体会員である応用生態工学会が主催する行事のご案内を頂きました。

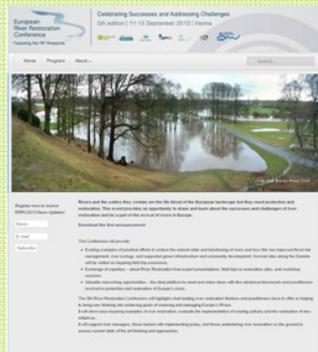
◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/816.html>

**【海外からの提供情報】**

■「ECRR (ヨーロッパ河川再生センター) の最新ニュースレター (5 月特別版)」ご紹介

欧州河川再生センター (ECRR) 事務局より、2013 年 9 月にオーストリアで開催される第 5 回ヨーロッパ河川再生国際会議 (5th European River Restoration Conference) のご案内を頂きました。



◆詳細は以下参照

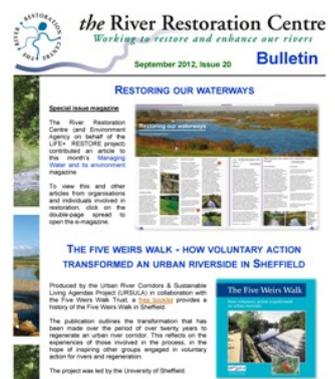
<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/827.html>

**【海外からの提供情報】**

■「RRC (英国河川再生センター) の最新会報 (Bulletin)」ご紹介

RRC (英国河川再生センター) の最新会報 (2012 年 9 月号) を RRC 事務局より送付頂きました。

本号では、英国のオンライン河川月刊雑誌への RRC 事務局の寄稿記事 (雑誌全体が閲覧可能)、都市河川のボランティアグループの活動を紹介した無料冊子などが紹介されています。



◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/799.html>

## 会議・イベント案内（2012年11月以降）

### （JRRN/ARRN 主催・共催の会議・イベント）

#### ■JRRN 講演会「市民による河川環境の見かた・調べかた ～英国「PRAGMO」に学ぶ～」

英国河川再生センター(RRC)発行の河川モニタリング手引き「PRAGMO」の日本語翻訳版発刊を記念し、RRC ジェニー・マント博士及び日本国内で河川環境再生に携わる方々を講師・パネラーにお招きした講演行事を開催致します。本行事の詳細は本ニュースレターP2をご覧ください。<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/190.html>

○開催日： 2012年12月1日（土）午後1時30分～ ○開催場所： 発明会館ホール  
※本行事は、（財）河川環境管理財団の河川整備基金の助成を受けています。

### （河川再生に関する主なイベント）

#### ■琵琶湖博物館シンポジウム「田んぼに魚がやってきた」

○日時：2012年11月3日（土） 13:25～16:45  
○主催：滋賀県・財団法人自治総合センター  
○場所：滋賀県立琵琶湖博物館 ホール  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1567.html>

#### ■第11回北陸現地ワークショップ in 石川

○日時：2012年11月9日（金）～10日（土）  
○主催：応用生態工学会  
○場所：ITビジネスプラザ武蔵  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1583.html>

#### ■フォーラム「千年の古都を支えた水～京都盆地の水 瓶と3つの河川～」(P26 参照)

○日時：2012年11月10日（土） 13:30～16:00  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1571.html>

#### ■ミツカン水の文化センター第9回里川文化塾「水の 郷・日野を歩く～用水路を活かしたまちづくり～」 (P26 参照)

○日時：2012年11月10日（土）  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1565.html>

#### ■第3回小さな自然再生のすすめシンポジウム

○日時：2012年11月18日（日）13:00～17:30  
○主催：兵庫県立 人と自然の博物館  
○場所：水辺のフィールドミュージアム研究会 等  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1577.html>

#### ■河川の樹林化とは何か ～ 樹林化現象の統合理解と 今後の河川流域管理にむけて～

○日時：2012年11月22日（木） 13:00 -  
○主催：(社)土木学会 水工学委員会 環境水理部会・河  
川部会  
○場所：神戸大学瀧川記念学術交流会館  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1557.html>

#### ■河川生態学術研究会 多摩川研究グループ 第3回研 究発表会～都市河川・多摩川の生態系と河川構造～

○日時：2012年11月28日（水） 13:00～17:45  
○主催：河川生態学術研究会  
○場所：府中グリーンプラザ 大会議室  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1563.html>

#### ■第173回 河川文化を語る会『火と水の祭典 天神 祭』(P26 参照)

○日時：2012年11月29日（木） 18:30～20:30  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1555.html>

#### ■第15回 河川生態学術研究発表会(P26 参照)

○日時：2012年11月30日（金） 10:30～17:45  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1573.html>

#### ■第174回 河川文化を語る会『多摩川源流の魅力と価 値、その可能性を語る～源流を生かした村づくりへの 挑戦～』(P26 参照)

○日時：2012年12月14日（金） 18:00～20:00  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1569.html>

#### ■第175回 河川文化を語る会『近年の気候変動と将来 の気候変化について』(P26 参照)

○日時：2013年1月22日（火） 18:00～20:00  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1579.html>

#### ■第6回近畿「子どもの水辺」交流会

○日時：2013年2月9日（土）  
○主催：近畿「子どもの水辺」交流会実行委員会  
○場所：ドーンセンター（大阪府立男女協働参画・青  
少年センター）  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1550.html>

#### ■皆様からのイベント情報提供をお待ちしています！

全国で河川再生に向けた様々な行事が開催されていま  
す。ローカル情報のPRや共有を目的に、皆様からの情報  
提供をお待ちしております。（JRRN 事務局）

# 会員募集中

## ■ JRRN の登録資格（団体・個人）

JRRN への登録は、団体・個人を問わず**無料**です。  
市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

## ■ 会員の特典

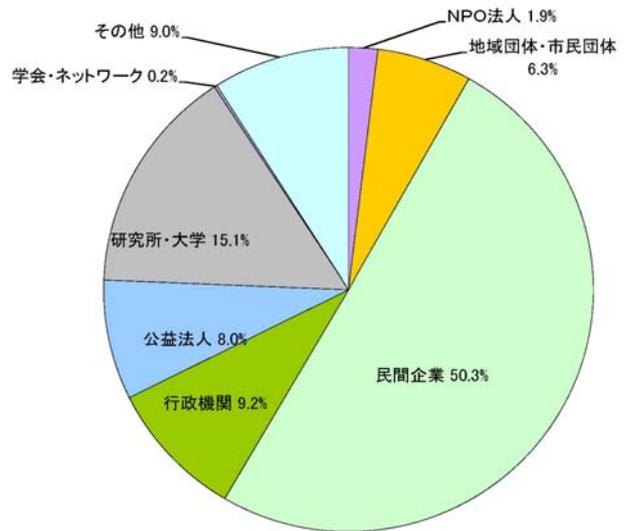
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

## ■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2012年10月30日時点の個人会員構成  
(個人会員数：575名、団体会員数：47団体)

JRRN 会員特典一覧表(団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

## 【発行・問合せ先】



日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局  
公益財団法人リバーフロント研究所 内  
〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階  
Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: [info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net) URL: <http://www.a-rr.net/jp/>

JRRNは、「アジア河川・流域再生ネットワーク構築と活用に関する共同研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

